

ヴァリエテ

宮本百合子

青空文庫

佳一は、久しぶりで大岡を訪ねた。

不在で、細君が玄関へ出て来た。四五日前からシネマの用事で京都へ行っているということであった。

「そうですか、じゃまた上ります。おかえりになったらよろしく」
再び帽子をかぶりそこを出たが、佳一は、そろそろ貸ボートなど浮かび初めた牛込見付の初夏景色を見下したまま佇んだ。

大岡は、ああいつていたって、本当に京都へ行ったのかどうか解りはしなかった。彼の彫刻のモデルになったお美濃さんという若い娘が、近頃恋人になった話は、佳一も聞いていた。大岡は、これまでもそういう種類のすきな女が出来る、十日でも二十日

でも、互があきるまで家をおっぱり出して、どこかへ引籠つて暮す性の男なのであつた。

佳一は苦笑と羨望とを、同時に年上の友に対して感じた。彼はエアシップの吸殻を、ボールでも投げるように、勢いよく濠の水の上へ投げすて、あゆみ出した。

午後二時の神樂坂かぐらざかはいたつて閑散だ。ここには特別彼を立ちどまらせるほどのショウ・ウィンドウもない。大股に坂を登つて行く、後で、

「いけませんよ、お嬢さま、そんなにお駆けんなっちゃ」

若い女の声がした。薄桃色のピラピラした小さいものが、眼を掠めたと思うと、いきなり五つばかりの女の児が、横から彼につ

き当たった。佳一はびっくりして身をひらいた。

「――近藤さん、どこいくの」

佳一は、二度びっくりで、女の児の顔を見た。

「なーんだ。楓ちゃんか！　びっくりしちやった」

楓は、早速佳一に手をひかせてあるきながら、また、

「ね、どこいくのよ」

ときいた。

「さあどこへ行こうか……楓ちゃんはどこへいらしたの？」

「歯医者へいったの」

「それで、アーン、アーン泣いたんでしょう？　電車の中まで聞

こえてよ」

「嘘！ 楓ちゃん泣かなくてよ、今日は」

「チョコレートばかりたべるから、今に齒なしになるんだろう」
「ううん、一本とるだけ」

気の利いた洋服を着せられた楓の手を引いているうちに、佳一は矢来やらいの榎の家へ行つて見てもいい気持ちになって来た。楓の母親が、佳一の姉と同窓であつた。その関係で、彼は一種のファミリー・フレンドとなつていたのであつた。

資生堂で、女中が命じられた買物に入つた。外の飾窓の前に立ちながら、佳一は、

「お母さまは？」

と楓にきいた。

「おうちにいらつしやるの？」

「うん、いらつしやるの」

「楓ちゃん、お家まで送ってつて上げましょうね」

丁度彼等の目の前を、真つ赤な着物をきたサンドウィッチ・マンが通り過ぎた。楓はその方に氣をとられ、佳一のいったことは返事しなかった。

女中が、

「では、ちよつとお待ち下さいまし」

と小走りに台所口へ廻る。それにかまわず、佳一は、楓を先に立てて庭へ入って行った。あまり広くない地面に芝を植え、棕櫚しゅろの

青い葉が、西洋間の窓近くさし出ている。窓は開いて、ピアノの途切れ途切れの音がした。

「おかあちやま、ただいまア！」

楓は、サンダルをつま先立って、窓の内を見上げ、芝生から叫んだ。

「おかえんなさい」

佳一は黙って楓の体を窓の高さまでさし上げてやった。楓は両手を振廻して喜んだ。

「ワー、見てよ、見てよ、おかあちやま」

「あら！」

桃色のかげにある佳一を見つけ、絹子は、いささかきまりの悪

いような顔でピアノの前から立つて来た。

「いらつしやい。ちつとも知らなかったわ、いやあね、いきなりそんなところからお覗きになったりして、さ、どうぞ」

窓枠へあちら向きに楓をのせたまま、佳一は、傍のイタリー風の大硝子扉から室内へ入った。

「暫く」

「本当に暫くね、お姉さまの方もお変わりなくて？ 私どこへもすつかり失礼しちやっているのよこの頃」

「相変らずでしょう。僕もこないだうちちよつと忙しかったんで行きませんけど」

「——この前お目にかかったの、いつ？ 聖マルグリットの音楽

会のときじゃなかった？」

「三月経ちますね」

「早いこと」

楓の体をおさえて絹子も窓枠によりかかっている。おかっぱの娘の小さいぱつとした桃色と、絹子の黄がかった単衣姿とが逆光線を受け活いきいき々とした感じで佳一の目を捕えた。

「榎氏もお変りなしですか」

「え、ありがとう」

大きい眼と唇に一種の表情を浮べながら、

「あのひと、いつだってアイロンナイト鉄騎士よ」

「お出かけ？」

「ええ」

榎は、商用でフランスへ半年ばかり行つて来た。歸つた当座は、絹子を連れて晚餐をたべに出かけたり、若い者を招んで、ダンシング・パーティを開いたりした。しかし、それは、ほんの一時のいわば榎の出来心で、フランスの僅か半年の影響が彼の感情から消えると同時に、榎は、もとの謹直一方の、やや退屈な良人に戻つた。

花火の散つた後のような心持で、絹子は、日常生活の詰らなさを、一層強く感じてゐるらしかつた。

「私のピアノだって、あなたのお姉さまのなすつてらつしやるお心持とは大分違うわ。和子さんなんか 本当にお好きで、天分も

おありんなって、本ものになろうとしていらつしやるんだからいいけれど、私なんぞ、外にすることがないし、したくつたつて出来ないから、まあ憂さ晴しみたいたなもんなんですものね」

佳一にそんな打あけ話をするくらいであつた。或るとき、姉の和子にそのことを話すと、和子は、

「そうお。……佳一さん、信用があるのね、おめでとう」

冗談とも本気ともつかず笑つていった。何かぼんやりした微妙なものがあることは佳一も感じてい、榎のいるとき、いないとき、絹子の打ちとけ方に相違のあることをも、彼は心づいているのであつた。

「さ、ポチやの子、見てらつしやい。楓ちゃん、まだか、まだか

ってないてたことよ」

窓際のデイヴァンにかけ、佳一は冷たい紅茶のコップをとり上げた。

絹子は、臙脂色えんじの帯の横を見せ、立ったまま二つ三つピアノでアッコードアツコード 音を鳴らした。

「変じゃないこと？ このピアノ」

「どうかしたんですか」

「大変なことになっちゃったの」

絹子は小さい声で、

「賈なんですって、ベツシユタインの」

といった。

「私閉口しているの、実は。これ買うとき、ほら榎、神戸へ行っていたでしょう。電報打ったり何かして買わせたんですもの」

「でも——本当なんですか、誰か鑑定したんですか」

「ついこの間、偶然会社の人に来て、麻布のミセス・フーシェって方のところへおとまりになったんですって。そこに、これと同じのが一台ありましたの。ミセス・フーシェだってベツシユタインだと思い込んで、お見せになったんでしょう。その人から判つたの。そんなことが分つたら、すっかり音まで変になっちやったようで……」

二人は笑った。

「榎さんにおっしゃって、じゃ処分した方がいいですね」

「それで閉口なのよ。——あのひと自分が家にいると、ピアノ、まあやかましいって部ですもの、すっかり私、信用を失わなくちやならないんですもの」

「じゃ、飽きたことにして、どこかへ押しつけるか」

絹子は、深いえくぼをよせ、黙って笑ったまま短いチャイコフスキーのバラッドを一つひいた。練習のつんだ正確なひきようだが、ニュアンスがない。いつも絹子のひきぶりはそうであった。

果物などむきながら、彼等はやがて、活動のことを話した。佳一は、

「とても素敵だ、僕、水が出そうになったところありますよ」とヴァリエテをほめた。

「通にいわせれば、いろんな苦情があるんだろうけれど、やつぱりよかつたな。リア・ド・プティ——女優ね、随分新鮮でよくやっていたし、ヤニングス、僕オセロよりいいと思ったな」

「まあ！ そんな？ 私オセロは見たのよ」

「そんならなおだ。ヴァリエテ御覧なさるといい」

「さ、どうお一つ、これは本ものらしいから上つて頂戴な」

サンキストと皮に文字を打つてあるオレンジをとり分けながら、絹子は、

「じゃ、お友達でも誘つてぜひ見ましょう」

弾んだ調子でいったが、

「でも、私共みたいな境遇話らないわねえ。ちよつとそんなもの

でも見ましようってお誘いしたって、直出かけられるような方一人もいらつしやらないんですもの」

榎は、ダンスをやめたと同時に、二十七歳の絹子が、稀には良人と活動でも見たい心持を持つことさえ、理解するのを中止してしまったようであつた。

絹子は、剥きかけたオレンジをそのまま^むたべもせず皿に置き、うつむいてフィンガー・ボウルに指先を濡し、いった。

「もう二年ぐらいになるわ、そんなところへ行かなくなつてから……いよいよお婆さんになるばかりね、ですもの」

佳一は、楓の大きい姉ぐらいにしか見えぬ絹子が、自分からよくお婆さんという、いわれる度に、妙な居心地わるい氣持になつ

た。彼は、自然に話の調子で、

「お連が面倒なら、僕お伴してもいいですよ」

といった。

「そう？　でもお気の毒ですわ、もう御覧なつたんですもの」

「平気！　それは。ウインダミア夫人の扇だつて二度見たんですもの」

「そうお？——じゃ御一緒に願おうかしら……早い方がいいわね」
「場所が悪くなりますね、あとだと……」

「夜私あけられないから、昼間でなくちや都合わるいんだけど——あなた、でも本当に御迷惑じゃいらつしやらないの？」

絹子にとって、活動見物は一つの冒険であるらしく、俄に活気

を帯びた眼の輝きや、さり気なく小声になった相談が、ふと佳一の興味を捕えた。

「小さいひとがやかましいし、いろいろだから……じゃ明日お午っから出ましようか。七時までに帰れますわね」

「でも……榎さん明日お出かけですか」

「出るでしょうきつと。……きのうは十一時ごろ出てったわ」
絹子は、薄い肩をちよつと引そばめるようにして笑った。

「今日は？」

「さあ一時過ぎてたかしら」

榎が形式的に顔を出す先代からの合名会社が日本橋にあるのであった。

「あした一時じゃ、工合わるいですね、かえりがおそくなるから」
「そうね……でも、きつと出て行くでしょう……」

帯留の下ところで、両腕を銘仙の袂の上から持ち合わせていた絹子は、

「ああ、じゃこうしましょう、もし家にいて都合わるかったらお電話申上げるわ、お宅へ」

「だって、なんて？」

「あら！ 本当にね、何ていいましょう！」

絹子と佳一は、おかしように、自然のおかしさをやや誇張した笑い声で笑った。やがて、佳一が、真面目になつて策を授けた。

「じゃ御都合わるかったら、電話で、こないだの話は、向うから

都合悪いといつて来たからって、いつて下さいませんか。安達さんヘテニス・コート拝借するんです」

「ああ、名案！ 名案！ あなたそんなに見えていらしつてなかなかのね」

安達というのは、絹子の実家で、池袋にテニス・コートを持っているのであった。

出られたら、十二時半頃、佳一の家へ寄ることに一旦決りかけたが、絹子が、

「でも、なんだか……」

と首を曲げた。

「お母様にお正月御挨拶申上げたつきりで、遊びにだけおよりす

るの、現金すぎて少し極りが悪いわ」

結局天気がよくて、榎が留守になったら、新宿の停留場で待ち合わせすることになった。

「とんだお伴おさせ申すわね」

「いいえ！」

佳一は真面目な、青年らしい面持ちで、頭を振り、相手の言葉を否定した。

その相談が纏まると、何か今日の用がすんだような心持になり、佳一は程なく椅子から立ち上った。

「——どうも失礼……じゃ」

「そうお」

絹子も同じような感情と見え、親密を表した眼つきで自分の場所から立った。

「では……どうぞよろしく」

玄関へ廻ると犬小屋の傍にいた楓が、さつきの桃色の上にエプロンをかけさせられ、駆けよつて来た。絹子は、母らしくその楓を自分の前に立たせ、改まって、

「じゃさようなら、失礼いたしました」

と、高く娘のおかっぱの上へ窮屈そうに頭を下げた。

佳一は、甘えて何かいう楓の声をうしろにきき、足早に門を出

た。往来を、今度はゆつくり江戸川の方へあるき初めたが、榎の家から遠のけば遠のくほど、彼の胸に漠然とした面白さが湧いた。絹子を、彼は決して恋していなかったし、美しい人とも思っていなかった。先方も種々な点から信用して内輪話もするのであることを、理解していた。彼となら、万一活動見物が知れたとしても、「でもあなた、佳一さんよ」

と絹子がいえば、少くとも一度は、榎も黙認しなければならぬであろう。用心深く、そこまで絹子が考えた結果にしろ、そうでないにしろ、佳一の興味に違いはなかった。妹の順子の友達たちでは、その家の玄関に送り込むまで全部佳一の責任であつた。それと違って、立派な大人なよその夫人が、自身に全部責任を負つ

て、彼と楽しもうというのは、何と愉快なことであろう！ 若し
ステッキを持っていたら何となく、一ふり、日没の町に向つてふ
つただらう軽やかな張合いある心持であつた。

佳一は、品よい頬を元氣な歩行と幾分の亢奮とで薄く赤らめな
がら、出入りのラジオ屋の店へ向つてあるいた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第四卷」新日本出版社

1979（昭和54）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第四卷」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

初出：「改造」改造社

1928（昭和3）年1月1日号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年4月22日作成

2003年7月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ヴァリエテ

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>